

古神道に關する一考察

文學博士 黒板勝美

神道、殊に古神道に關する予一家の考察については、既に十年前から折に觸れて發表したが、まだ之を一括して發表したことはないから、茲に之を述べて見たいと思ふ。

日本歴史、殊に古事記、日本書紀、舊事本紀などを讀んで見ると、古神道に對する考へは、是等各種の文献に於て必ずしも同一ではなくして、其の間には幾許かの小異が發見せられるやうである。今日最も普通に古神道と云へば、國家神道を中心としての考を主とするものゝやうで、是等の考を持つてゐる人々は、神道は其の發展の道程に於て儒教又は佛教にも相當觸れてゐるが、而も成るべくそれ等の色彩を除いたものとして神道を觀ようとしてゐる。何れにしても元は孝徳紀三年四月の詔にある「惟神」といふ語が一つの基礎となつてのものであつて、本居翁などは、天照大神即ち日の神を宇宙支配の神とす

る意味に於て古神道を高調され、又、産靈といふことを古神道の作用と觀て、古神道はすべて産靈の働きに由つて行はれてゐると説いてゐられる。しかし國家神道を以て直ちに古神道其のものと考へていかどうか、或は何か其處に他の雜り物がないであらうか、私は其の點について少しく自分の意見を述べて見たいと思ふ。

第一に惟神の道といふ觀念が出来上がるまでに、歴史方面から觀て此の日本の太古の神話に現れてゐる多くの神々があるが、其の神々の中で天照大神以前の神々を如何に觀るべきか、が問題である。これに就いて本居翁は色々と議論を述べて、之を實在の神と考へ、同時に又、古傳は其のまゝに觀るべきものだとされてゐる。此の後段の議論は誠に穩當な意見であるが、しかし最初から高天ノ原に成り給うた神をも若し實在の神とするならば、私は茲に一大問題に逢着せざるを得ない。それは、果して然らば何故に天御中主神は皇室の御祖先として祭られないか、と云ふ事實である。日本書紀又は古語拾遺などに據ると、天照大神が皇室の祖宗として伊勢に祭られ給うたのは、垂仁天皇の朝だといふことになつてゐる。或は事實としてはもつと時代が遡れるかも知れないが、兎に角皇祖として初めて祭られ給うた神として歴史に明記されてゐるのは天照大神に在しまして、其の以前の神が祭られた事實は見えないのである。私は此の事から推して、天照大神以前の神々は、實は後になつて日本人の思想の中へ入つて來たも

のと観ねばならぬと思ふ。而も此の間更に問題となるのは、實は天照大神以後に現れた神として考へられる神々即ち所謂造化三神は、或る神話の上では天照大神と同代の神とも認められ、それと同時に又子孫を持つてゐる事である。即ち姓氏録其の他の記載に依ると、少くとも我々の祖先の中には造化三神の子孫と稱するものが存在するのであるが、是等の事實から考へると、或は此の天照大神以前の神々の中には、皇室の祖神以外の神々が雜つてゐるのではあるまいかと考へられる。固より私は神話を以て何等矛盾のないものとは考へない、寧ろ矛盾が神話の特質であるとさへ思ふものであるが、しかし記紀の神々の中では必ずしも第一祖では在しませない天照大神が疑もなく皇祖として祭られておいでになるのに、更に其の先神たる諸冉二尊、或は國常立、天御中主等、天照大神以前の神々が、重要な祭祀に與つてゐられないといふことは、祖先崇拜の精神から考へて、頗る不可思議な問題ではあるまいか。

假に之を私の一家について考へて見るのに、系圖で見ると十二三代前の事しか的確には分らない。何れでも江戸時代の初に或る藩に仕へて黒板の姓を稱してゐたやうで、其の先は藤原氏であるといふが、私には必ずしも鎌足が祖先であると云ふ者は浮かんで來ない。更に遡れば當然天兒屋命まで行ける理窟であるが、さうなると一層茫漠として、たとひ其れが實在の人物であるとしても、祖先として之を確認することは困難である。確に祖先として考へられるのは、何としても十二三代、若くは十四五代以前まで

のものである。

之と同じ事で、天照大神が皇祖であらせられると云ふことは、古代のお方々にも確に考へられてゐたが、それより以前の神々、例へば諾冉二尊などになると、其の實在の如何は兎も角、單に理窟の上の存在が考へられるだけで、眞の祖神としての働きの現れて來ぬのではあるまいか。されば假令其の神の子孫といふ者があつても、これ亦單に理窟上の關係で、既に父があれば祖父があり、祖父があれば曾祖父があるといふやうな意味で、謂はゞ人爲的に各神々が現れてゐるのではあるまいか。即ち換言すれば、今日まで古神道の神として考へられてゐる神々、古神道の史料として紀記の神代卷の開卷第一に現れて來る神々の中には、斯かる歴史以上の理窟の上に作られた神が交つてゐて、それが神代紀の要素の一部を形つてゐはすまいか、とも考へられる。我々が古神道を觀るに當つて第一に研究を要するのは此の問題である。併し私は暫く此の解決を後に譲つて、他の方面を一顧せねばならぬ。

二

日本の太古代には、神世七代といふことが稱へられてゐる。或は天神七代・地神五代とも云ふが、斯の如く7の數字を使ふ場合は日本の古典には例が少いと思ふ。日だけは紀記にも七日七夜とあり、歌にも同じ事が出てゐるが、其の以外には多數の意味で7の字を使つた例が餘り出て來ない。釋紀に引いて

ある山城風土記などを見ても、日だけは七日七夜遊ぶとあるが、其の外は多く8である。例へば大八洲とか八咫鏡とか八尋殿とか8の例は幾らも算へ上げられるのに反して、7の例は乏しい。どういふ理由で日だけが七日七夜となつてゐるのかは不明であるが、兎に角日本では數の表示は多く8で、古いころでは奇數の表示は殆ど見られないのが事實である。然るに一方では造化三神とか、天神七代とか、地神五代とか、殊に神の事に關しては奇數が割合に多く使はれてゐるのは果してどういふ理由であらうか。此の3とか5、若くは7といふやうな數詞を、我々の祖先が自ら或る物を纏めて一のグループとして見る上に果して使つたかどうかは、なほ考古學者の説をも聽いて見ないと俄に斷定が出来ぬが、私としては何だか日本的でないやうな感じがする。

ところが試みに、支那方面を見ると、3とか5、又は7、9などの數字が盛に使はれてゐる。例へば三皇五帝などは其の顯著なものである。三五曆記の中には此の三皇五帝といふ名數の起因を考察して、數は一に起り、三に立ち、五に成り、七に盛に、九に處すなどと書いてあるが、これは恐らく道教的思想、遡つては老莊の思想に基いてゐるものではないかと思ふ。私はこれから考へて、日本の神世七代といふことが如何にして考へられたかについて多少の疑問を持つのである。殊に、諾冉二尊以前の神々を調べて見ると、男神が四柱、女神が四柱、合はせて八柱である。此の八柱の神が茲に現れてゐるといふ

ことは古來の日本の數詞たる8に恰も相當するもので、神祇官の八神殿などと結びつけて考へても、此の方が如何にも日本人らしい考へ方であると思ふ。神世七代などといふ思想は聊か支那臭い。尤も神世七代と云ふことも、明らかに古典の上に出てゐる以上、我々の祖先が考へ出したものであるのは勿論であるが、しかしそれは天照大神を以て祖先とした後の考へであつて、其の以前から其の様な思想があつて後に、天照大神が現れ給うたのでないことは、現在伊勢の大神宮が祖廟として皇室によつて祭祀されてゐる事實に依つて見られはすまいか。

そこで私は此の天照大神以前の神々の現れが、如何にも7の數にピッタリと合ふやうに整頓されたのは、後代の事と考へるのであつて、同時に又、日本人に斯かる考が出たのは、果して日本人だけの思想によつたものであるか、或は支那外來の思想が、日本人固有の思想を助けて茲に到らしめたものであるかに就いて、大なる疑問を持たざるを得ない。が、尙今一つそれに附加へて述べて置き度い意見がある。それは大正十一年の末頃であつたか或る會で發表した意見であるが、日本の古代には佛教の渡來以前に於て既に宗教思想上大變動があつたらうと思はれることである。我國と支那・朝鮮との間には既に古くから交通が行はれてゐたのであるから、其の長い間、神代以來の純なる神祇崇拜が其のまゝ何の變化も受けずにゐたらうとは思はれない。即ち我國固有の古神道の上にも、或は時代的色彩、換言すれば外國

文化の色彩が加はつて來てゐないかと思はれる節がある。現に日本書紀などでも、奈良朝の初、元正天皇の御時に舍人親王御一人が統合的に執筆されたものとすれば議論の餘地はないが、實際の内容を見ると、あれは記録類によつて編纂されたもので、全體的に文體が一致しないのは勿論、同じ部分に於ても文字の使ひ方が整頓されてゐない點が多い。これは各時代に互る多くの材料を集めて編纂されたものであることを證するもので、此の點に於て書紀は、後世統合的に書かれた大日本史や日本外史などと撰を異にしてゐる。例へば景行紀の日本武尊の條下を見ても、最初には尊の御名を小碓尊と書いてゐるかと思ふと、次には日本武尊と書き、後には又小碓尊の尊の字を除いて小碓王と記してゐる。これは恐らく二つの材料が混入して一緒になつてゐるのではあるまいか。又、地名にしてもツクシなどは筑紫とも又竺志などもあつて當て字が各場合で異つてゐるが、是等も元の史料を其のまゝに載せた結果ではあるまいか。尙又雄略紀の或る條の如き文選風の明文があるかと思ふと、景行紀の熊襲征討の條の如きは豊後風土記と同じ文章が其のまゝに載つてゐるなど、殆ど文體の統一といふものがない。是等は畢竟色々材料が集められ書留められたが爲で、諸家の纂記が斯の如く殆ど其のまゝに採入れられてゐることを考へると、書紀の材料は必ずしも奈良朝の初めのものばかりではなく、古い時代の思想が其のまゝに現れてゐるにせぬかと思はれるのである。だから私は日本書紀などを讀む場合にも、神代紀に出てゐるから

神代に在つた事實、應神紀に出てゐるから其の御代の事實であるとは必ずしも考へない。本當の時代を突止めるためには、其の一々の事實に即して究明する外はないと思つてゐる。

三

そこで此の見地から日本書紀を見ると、隨分後の記載にも、奈良朝以前の古い時代の社會生活を髣髴させるものがある。そして他の方面から又之を助けるものに古墳の發掘物がある。近頃は考古學方面の人々が多く古墳を發掘するが、其の中から出て來る遺物には鏡類が非常な多數に上つてゐて、其れ等の鏡の中には神獸鏡が多くある。これは鏡の裏面に四神像並に不思議な獸像を現した彫刻のあるものである。其の外には蟠龍鏡なども見えるが、是等の鏡が古墳の中に斂められてゐるといふことは、必ずしも單なる趣味から出てゐるものとは思はれない。態々是等の神獸鏡を取寄せて古墳に埋めるといふには、もつと重大な理由がなければならぬ。昔から我が國では鏡を殊に大切にしたもので、神の姿を映すものとして之を神聖視し、之を神體として崇め祭つた事は、三種の神器の例によつても明瞭である。さすれば此の古墳の中から出て來る鏡についても、同じやうに信仰的意味の籠つた物として見るのが至當ではあるまいか、と斯う考へて來ると、或は神獸鏡や蟠龍鏡が最も多く古墳から出て來るのも、實は其の鏡背に現されてゐる神に對しての信仰が元に成つてゐはすまいかとも思はれる。殊にそれ等の鏡の中には

背銘に道教の神の名が明らかに現されてゐるものが大分あつて、中にも面白いのは、神像の脇に、西王母・東王父などの文字を書込んだものさへ存在することである。是等の事を考へると、我々の祖先の中には、單なる神祇崇拜、即ち天つ神・國つ神を祭る信仰の外に、他の信仰をも同時に併せ持つてゐたものがあつたのではなからうかとの疑ひが起つて来る。

事實日本武尊の話の中にも、或は田道間守の話の中にも、浦島子の話の中にも、更に又聖徳太子が片岡山で見られたといふ乞食の話の中にも、仔細に注意して觀ると、一種の神仙譚的なほひが大分漂うてゐるが、是等の神仙譚は、奈良朝の初頃よりも更に古い時代のものとして考へることが當然ではないであらうか。其の證據として見るべきものに私は大祓の祝詞を擧げることが出来る。

大祓の祝詞には二種類ある。其の一つは中臣祓、東西の文部の讀む祝詞であるが、文部の讀む祝詞は日本の詞でなく支那の文章で、其の中に現れて来るのは道教の語である。此の文部が平安朝の中頃あたりにも盛に其の漢文の祓詞を奏してゐるが、察するにこれは、奈良朝よりも更に古く、彼等の祖先が日本に來朝した時に持つて來た習俗ではあるまいか。そしてそれが大祓にまで用ゐられてゐる所を見ると、道教も亦、彼等文部の祖先たる阿直岐・王仁などが應神天皇の御代に來朝した其の時に、既に日本へ來たことを證明するものではあるまいか。私は是等の事實から觀て、支那の後漢代に起つた道教は、早く

から朝鮮を経て我國に傳來し、それが日本固有の神祇祭祀と相並んで行はれてゐたが、今日は其の傳を失ひ了つたのであると考へる。

なほ此の外にも齊明紀あたりを見ると、仙人式のもが大分に見える。私は佛教の渡來以後にも道教が一方に存在してゐたのではないかとさへ思ふ。齊明天皇の二年に出來たと云ふ兩槻宮の如きも、或は道教の寺ではないかと思はせるやうな文字が使つてある。私が此の疑問を發表した時には、それ程までに盛であつたと想はれる道教が如何にして結末を告げたかといふ點をまた詳細には考へ出さなかつたが、今假に考へて見ると、佛教の渡來以前に、道教が日本へ入つて、それが日本の神祇崇拜と渾融して古神道を成してゐた、其處へ又佛教が新に入つて來て佛教と道教との衝突を來したのではあるまいか。恰度支那でも佛教と道教との争が隋から唐代にかけて起つてゐるが、さういふ支那での關係が日本へ來ても同じく現れた結果が、道教の衰滅となつたのではあるまいか。

現に弘法大師の最初に書いた「三教指歸」を讀むと、平安朝の初に於て大師は、如何なる思想・信仰の上に立つて社會を救ひ國を救ふべきかを論じてゐるが、當時なほ道教が社會に一部の勢力を持つてゐたことが、其の議論の上に著しく現れてゐるのである。大師は權化再誕の人と云はれてゐるが、元來は儒學系統の家の出である。それで最初は儒者とならうと思つたが、段々研究して見ると、どうも儒教で

は物足りない。そこで更に其の研究範圍を擴げて、儒教・道教・佛教と三つの教の比較研究をして、其の歸結する所を指示したのが、所謂三教指歸である。此の大師の結論では、勿論佛教が一番いゝと云ふことに成つてゐるが、その佛教と共に儒教・道教が研究の對象となつてゐるのを見ると、道教の勢力が當時なほ全くは衰へてゐなかつたのである。何にしても支那から滔々として入込んで來た大陸文化の中に道教が入つてゐなかつたとはどうしても考へられない事で、既に道教の輸入を認めるとすれば、其の衰滅が後の外來宗教なる佛教との衝突に因することは争はれない。そこで或は私一個の單なる想像に過ぎないかも知れぬが、私は道教の終期を役の行者に持つて行つてゐる。

役の行者は、これまで佛教の密宗の人として考へられてゐる。眞言宗でも其の様に解してゐるし、佛敎學者も、佛敎史の著者たる村上專精氏なども皆行者を佛敎家の一人としてゐる。是等の人々は皆奈良朝の初に密宗が我國に入つたといふ説に一致してゐるのであるが、併し私の考へでは、あの時代の文化は常に都市中心で發展してゐる。然るに密宗が先づ地方的に日本に行はれたとは文化の性質上どうしても考へ得られぬ事である。寧ろ役の行者は古代日本に行はれた山林修行者の最後のもので、それが文武帝の時代に失脚したのであるまいかと私は考へる。行基の如き初めは役の行者と關係があつた。其の證據に行基の開いた寺は山の高い處にある。石切・生駒など皆それである。續紀で見ても、行基の最初の

寺は奈良の中央にはなく、何れも山上を開いて建てたものである。ところが其の行基開創の寺である生駒などは仙人と關係の深い山で、是等の點から觀ても最初は行基も役行者の亞流で、後にそれが佛教に轉じたのであることが十分に了解せられる。聊か話が岐路へ外れる嫌があるが、奈良の大佛建立と行基との關係からして、世間では行基を以て神佛習合の考へ、本地垂跡の思想の元祖であるとする者と、又之に反對して斯の如きは傳説に過ぎない、神佛習合の考へは平安朝でないとなし論ずる者がある。此の論争には何れも相當の理由があるやうであるが、併し若し行基が元來道教系統の人であつたとすれば、佛家の所謂本地垂跡とは違つた意味で、伊勢と大佛との關係を結びつけなかつたとは必ずしも斷定できまいと思ふ。

兎に角私としては、道教が古く日本に存在した事實は何としても認めねばなるまいと考へる。既に道教が日本へ入つて來たとすれば其の後は如何なる道程を取つて進んだか、次にはそれを調べて見る必要がある。支那では佛教が入ると、直ちに道教との争が始まつて、一面では兩々相反撥してゐるが、他面では道佛二教の結合を示してゐる。此の事は一切經の中にも道教的材料が遺存してゐるのでわかる。私は茲で支那の道佛關係を論ずるのが目的ではないが、道教は佛教の教義を、佛教は道教の教義を互に攝入れて、其の間に或る點までの融和を生じてゐることは確である。さすれば日本に道教が入つて來て

も、必ずや日本人固有の思想・信仰と結びついて、日本の神祇崇拜の上に何ものかを寄與したらうと觀るのは、強ち誤りではあるまい。中には道教が純粹に古代日本の神祇祭祀と相對立して行はれた事もあらう。例へば六月の大祓の詞の如きは道教の行事が固有の神祇崇拜と相對立して行はれたことの著しい一事證である。單に此の方面だけから觀ても、道教が如何に古代日本の民族生活の間に勢力があつたかを知ることが出来るが、更に今一つ我等の注意を喚起するのは、それが日本固有の信仰思想の上に與へた影響である。

元來日本固有の神祇祭祀に對する信仰、神祇崇拜の思想は、民俗的であつて、決して抽象的な理窟ではない。超自然の力に對する信仰である點は一つであるとしても、哲學的基礎の上に立つた宗教ではなく、社會生活の上から自然に起つたものである。自然崇拜といつても、或は祖先崇拜と云つても、決して理窟の上に出つたものではない。此の純な又ウブな信仰は甚だ尊い美しいものではあるが、段々社會生活が進んで、外國との交渉が起り、隨つて外國の新たな宗教が入り込んで來れば、所詮信仰も元のまゝではゐられない。昔ながらに古い民族固有の宗教儀式を守り續ける一面に於ては、同時に又外來の宗教をも採入れ、或は古來の宗教儀式の中に、外國的要素を參酌して融合を試み、それに依つて新に一つの理窟を作上げることにならねば、到底新來の宗教とは對立して行く力が持てない。されば此の意味に於

て、日本の神祇崇拜の中には、道教的要素が加へられたに相違あるまいと私は推定する。現に伊勢神宮などの種々の儀式を見ても、日本固有のものらしく無い行事の多くが存在する。これに付いては勿論色々の説もあらうが、例へば地鎮祭・山口祭などの中には、これが果して日本固有のものであらうかと疑はれるやうな要素を少からず含んでゐる。

恰も大祓に用ゐる人形のやうに、鐵の人形を埋める事などは、殊に顯著な例であつて、これが日本固有のものであるとは俄に信ずることが出来ない。既に伊勢大神宮の中にまで外國要素が入込んでゐるとすれば、他の大小の神社の祭に外國要素が加はつてゐることは云ふまでも無からう。此の事は單に儀式行事の上ばかりでなく、他の方面に於ても見られる。例へば後に佛教が入つて來て、寺院の建築様式が日本に入ると、神社の建築様式も漸次に其の影響を受けて餘程變化して來てゐるやうである。そこで既に佛教渡來の影響が神社建築に影響してゐるとすれば、それから類推して考へられるのは、更に其の以前の神社建築にも既に外國の要素が加はつてはゐないかといふ事である。私は古く支那で道教の神を祭つた當時の建築様式がどうであつたかについて特別に研究した事がないので、よくは分らぬが、佛教渡來後の影響を見ると、此の疑問は必ずしも否定ができないと思ふ。若し極古代の建築様式にも外國要素の混入を多少に關らず認めることができるとすれば、今日存在してゐる古代式神社建築が純粹に日本的

なものであるまいとするのは、歴史的に考へて必ずしも誤りではあるまい。即ち私には其處にも道教の影響がありはせぬかを疑ふものである。

又今一つ、日本には古代から歸化人が多いことも注意を要する。是等の歸化人は重に支那・朝鮮からのものであるが、決して一人や二人宛ではなく、王仁が來れば王仁の一族、秦氏が來れば其の一族が共に來るといふ風な部族歸化であつて、彼等は何れも日本の氏族制度の中に入つては、其の部族としての職業を以て仕へたのである。既に部族として入つて來た以上、其の用ゐる言葉の如きも、支那若くは朝鮮のものであつたらうし、生活状態も彼等固有のものであつたに相違ない。さすれば其の言葉なり生活状態が日本の古代社會に影響を及ぼし、同時に又信仰方面にも影響を與へたらうといふことは當然考へられる所である。そこで次に問題となるのは、彼等移住民は、朝鮮其の他に居たときには當然其の民族の神を祭つてゐた、それを日本へ渡つて來てから捨てたかどうかと云ふ事實であるが、これは日本人が外國へ移住しても、伊勢若くは諏訪、金毘羅等各其の信仰してゐる神の社を建て、齋き祭るところから考へても、やはり彼等が其の信仰を守り續けたと見るのが至當であらう。果してさうだとすれば我が國古代の外來歸化人は、其の數も多く、大和・河内・山城等何れも帝都の近くに分布して、専ら中央地方を舞臺に活動してゐたのであるから、其の文化の影響はウブな古代日本人の間に非常に多く及んだこと

であらう。そこで彼等の神は當然我が國民の間にも傳へられたであらうが、既に外國の歸化人が奉じて來た神であるとすれば、それは天つ神でも又國つ神でもなく、その以外の神でなければ成らぬ。日本書紀などに蕃神と出てゐるのは恐らく是等の外國神であらうと思はれる。

欽明天皇の御時に百濟の聖明王が釋迦佛の金銅像一軀と幡蓋並に經論若干卷を獻じて佛教の輸入を圖つたので、天皇が群臣に御相談あらせられた處が、物部大連尾與と中臣連鎌子が同じく奏して「今改拜蕃神、恐致國神之怒」と反對意見を陳べたといふ。此の事は日本書紀にも古事記にも出てゐる周知の話で、兎に角此の時には朝廷で其の釋迦像をお祭りにはならなかつたのであるが、物部・中臣等の人々が、釋迦像を以て蕃神であるとした反面には、當時既に民間では、あちこちに佛像が祭られてゐたのであつて、只皇室ではそれをお祭りになつてゐなかつたのではないか、との想像が入れられる。恰も國民が皇別・神別・蕃別と別れてゐたやうに、神社にも其の蕃別に當る蕃神が早くからあつたのであらうと見るのが至當でなからうか。私は佛教渡來以前既に蕃神が存在してゐたのではないかと思ふのである。

四

先年朝鮮の濟州島に行つた時に私は巫子の状態を調査した。濟州島は朝鮮半島の南に在る絶海の孤島で、割合に朝鮮の文化が及ばず、可なりに古い神話を持つてゐる。元代には一時元の朝廷の牧場となつ

て直轄されてゐたこともあるが、さ程長い年數ではなかつたのか一體に古風を保つてゐる。東國輿地捷覽には、此の島の開闢説話が出てゐるが、何となく宗像三神との間に聯絡があるやうである。島内には今でも三聖穴といふ古い噴火口の跡があつて極めて神聖な場所とされてゐるが、神話に依ると、昔此の聖穴から三人の男神が忽然として出現した。すると或る時海岸へ一つの函が漂著したので早速開いて見ると中から三人の姫君が現れた。これは日本國王の子であつたが、三人の男神と各々結婚して三對の夫婦となつた。濟州島は斯くして初めて出來たのであると云ふ。何としても宗像三神との間に關係のありさうな説話であるが、我が國の隱岐の島から直西に十七八里の海路を行くと、此の濟州島に到達するのであつて、其の間には黒潮が流れてゐる。恐らく此の話もそんな關係から出來たのであらうが、今日の島の状態を見ると、此處には神社が一つもなく只巫子がゐる。是等の巫子は、三聖穴から出た男神の一人で此の島の最初の王となつた者の姓を名のつて居り、其仲間には一人の頭分がある。どの巫子も皆銘々の神を持つてゐるが、頭分の巫子は三柱の神、其の他の巫子は各一柱の神を持ちいついてゐる。そして巫子が死ぬ時には弟子の誰かに其の神を譲る。祈禱の目的は病氣平癒・五穀豐饒等必ずしも一定してゐないが、祈る時には銘々が持ちいついてゐる其の無形の神を祭つてするのであつて、時には日本の神樂式のものもやる。私は其れ等を見て、若し日本に聖德太子と云ふ人物が無く、佛敎が輸入された結果、

日本在來の神社を全部破壊するやうな事が起つたならば、恐らく今日の濟州島のやうな状態を現出したのではないかと思つた。彼女等が戴いてゐる神々には何れもそれぞれの名があるが、それが皆著しく道教的である。是等の神が果して道教の神であるか、或は民族的の神の道教的變化をしたものであるかはまだ考へ得ないが、兎に角道教の影響の深く及んでゐること、そして其れが又、頗る日本古代の信仰と似たものであることだけは認められる。

これが果して、古代支那又は古代朝鮮に行はれた蕃神かどうか、なほ又、それが朝鮮の本島にもあつた古事かどうかは、今日之を確めるに由もないが、古代の朝鮮方面には、餘程日本の古代の神々と似通つた神が祭られてゐたといふ事だけは、此の濟州島の状態から跡づけることが出來ようと思ふ。さすれば支那・朝鮮等の外國から移住した者が、蕃神を祭つても、日本神祇との衝突は必ずしも起らず、一緒に進んで來ることも出來たらうし、又場合によつては、其の所謂蕃神でも、國家に功勞のある神とか、特別の場合特別の威力を發揮した神があつたならば、朝廷で之をお祭りになる事も起つたであらう。恰も神祇式の中に藥師菩薩の神社があるのと同じやうな事柄は古い時代にも見られたであらうと思ふ。

斯ういふ風に外國移民が持つて來た神が、日本の神になつてゐる事實があるとすれば、當に其の民族固有の神のみならず、道教の上に現れた神を持込むだ事もあつたらうと思はれる。これは必ずしも王仁

とか阿直岐とかの子孫ばかりでなく、其の以外にも多くの例があつたこと、見ねばならぬ。此の時に方つて我が日本人の信仰状態はどうであつたかと云ふに、恰も佛教渡來の後に、我が日本人は所謂民俗信仰の固有神祇を祭ると同時に、新宗教を信ずることも差支がない、即ち佛教を信じたからと云つて、強ちに舊來の神祇信仰を捨ててには及ばないと云ふ考が、聖徳太子時代に許されてゐるところを見ると、此の思想は必ずしも欽明天皇時代・聖徳太子時代に初まつた事ではなく、それよりも更に已前、道教が初めて我が國に輸入された時代に、夙く起つた所の事實であらうとも考へられる。元來日本人は宗教に對して餘りに凝り固まらない民族ではなかつたらうかと思はれる節がある、だから既に固有の宗教を持つてゐても、其の神が新來の神を嫌はなければ、それを附加して祭つてもわるくはない、其の爲に舊來の信仰を棄去る理由はない、何れも共に幸福を與へる神であるならば、一つよりは二つ、二つよりは更に三つの方がいと云ふやうな考を持つて、我々の祖先は新來の宗教に對したのではないだらうか。

由來神を祭るといふ事は、權利であると同時に義務である。權利のないものは祭れないと同時に、義務のあるものは必ず之を祭らねばならぬ。古代の部族には何れも其の部族の神があつて、其の神を捨て、他の神を祭ることは許されない。随つて宗教儀式たる祭に於て拜まれる神は、必ず常に其の部族特有の神に限られ、若し其の神を祭らなければ必ず神罰が降り、其の部族の生存上に何等かの面白からぬ結果

が生ずると信ぜられてゐたやうである。だから日本人として祭る神は、原則として天つ神・國つ神の範圍に制限せられてゐたことは勿論であるが、それを棄てさへしなければ、其の外に道教の神を新に附加へて祭ることも決して抑制せられてゐなかつたらうと私は觀察する。現在の日本人の信仰状態を見ても、作法として又宗旨として主として信ぜられ守られてゐる神道又は佛教以外に、不動尊とか辨財天・觀世音などを信じてゐる例は多く見る所で、之を神祇だけの關係で見ても、一定の氏神の外に、稻荷とか明神とか、特殊の利驗のある神を信仰禮拜する傾向が著しい。此の傾向は恐らく傳統的のもので、古代に於ても之と同じであつたらうと私は考へたい。即ち是等の事から私は、我が日本には新宗教が入つて來た場合、舊信仰を棄てさへしなければ之を採用してもよく、同時に又、新宗教を信じても舊信仰を棄てる必要はないとする思想が古くからあつたものと斷ずるのである。

若しさうでないとするれば、聖徳太子の如き聰明なお方がいらせられても、又、如何に神祇の祭祀を大切にせよといふ詔勅が度々出ても、佛教が澎湃たる勢を以て浸潤して來れば、國民は遂に全く舊來の神を棄てる事になり、朝廷に於ても自づから神を祭ることを面白くないとする議論が出なかつたとも云はれないと思ふ。しかし我が國には古く道教の入つて來た場合の慣例があるので、其の場合と同様、只舊來の神祇信仰の上へ佛教が加はつたゞけのものであると觀て、佛教が新に入つて來た爲に決して根本た

る神祇信仰に動搖を來さなかつたのであらう。

五

そこで私は、已上の事實から觀て、一面に於ては古く日本に道教が入つて信ぜられてゐたらうと云ふ一つの假定を置くと同時に、他面に於ては此の道教が日本の神祇祭祀の上に非常な影響を與へ、茲に初めて一つの神道といふものが成立したのではあるまいかと考へる。換言すれば一面神祇祭祀の儀式の上に道教要素が附加したと同時に、日本神祇に對する考の上に一つの理窟が附いたといふことを考へ得られないだらうか。そして其の理窟を古く神道と云ふやうな語を以て呼んだのではあるまいか。更に別の言葉を以て云ふならば、日本古來の神祇祭祀と道教との一つに合躰したものが即ち神道ではあるまいか。

これまで神道といふ語については、國學院大學の河野教授などが専ら調べてゐるが、今までの解釋の一二を云ふと、本居翁の如きは、神道即惟神の道として觀てゐる。又最も普通には、前に述べた孝徳天皇の詔勅中に出てゐる惟神といふ語の註釋に「神道云々」といふことが出てゐるのに基いて、惟神の道即ち神道であるとしてゐる。

此の孝徳天皇の詔勅の解釋については從來學者が苦んでゐる。在來の學者は「惟神者謂隨神道亦自有神道也」とは意味の分らない字句であると云ふので、これは攪入であらうとして捨てゝゐる。水

戸學の方では、之を「亦自ラ神道ヲ有スルヲ謂フ也」と讀んで、「謂」の字が今一つ間に落ちてゐるのであるとしてゐる。ところが同じ詔勅の少し後の箇所を見ると、カミナガラといふ言葉を「隨在天神」の字に當てゝ之を「カミナガラモ」と訓むでゐる。さうすると「隨在天神」と云ふ意味が、カミナガラモである。これに依ると、上記の「隨神道」も、「惟神者謂隨神道」と訓んだ方がよいので、「隨神道」と訓むと意味が違つて來る。殊に此の惟神の詔勅には「惟神我子應治故寄是以與天地之初君臨之國也」とあつて、要するにこれは天照大神が皇孫に千五百秋の末までも天壤無窮に治らせよと仰せられた意味を述べさせ給うたものであるから、「惟神」は「惟レ神ガ」の意味である。此の文中には必ずしも「神道ニ隨フ」意味が現されてはゐない。果して「惟神」をカミナガラモといふ風に訓むのであるとしても、「神道に隨ふ」の意味に解するのが適當かどうかは此の場合甚だ疑はれるのみならず、用明紀には又、此の「神道」を佛法と相對せしめて、「信佛法尊神道」とあり、孝徳紀には「尊佛法輕神道」とある。斯様に佛法に對する神道として、相並べて見るときに、神道は之を如何に解釋すべきものであらうか、此の佛法の「法」を佛法僧の「法」と見るならば、當然其の中には種々の教を含むものと解すべきであるから、それに對する神道にも、既に一種の教義の成立を或る點まで認めねばならぬ。

私の考では、どうしても日本固有の神祇崇拜は、理窟によつて作り上げられたものではなく、凡てが

民族生活、社會生活の上に自然と起つたものであると思ふ。それを後代になつて振顧つて見て、神祭には穢を禁ずる、清淨潔齋でなければならぬ、清く正しい心で祭らねばならぬ、それが神に仕ふる道であり社會に處する所以であるといふ風に、あとから理窟を附加へたものであつて、即ち前にも述べたやうに、昔ながらの神祇崇拜が單純に元のまゝの形で佛敎渡來まで、或は又其の後の神佛習合時代まで進んで來たのではなく、既に其の以前に於て、固有のものゝ上へ一層文明的な理窟をつけて神道といふものを築き上げて居はせぬかと思ふ。換言すれば、一つの整頓した形に出來上つた神道といふものは割合に早くから存在したものではないかと思ふ。しかし斯う云つたからとて、決して日本固有のものが採るに足らぬものであつたとするのではない。日本の民俗信仰は決してファナチックな頑冥なものではなく、やはり民族思想の上に特質を現してゐる信仰であるから、自由に外國の思想をも採入れ、それに依つて一の教に進んで行くことが出來たのであると思ふ。

そこで再び前に復つて云ふと、日本の古い神話は、此の一種の道としての要素を加へられて粉飾されてゐるのであつて、天照大神以前の神々が、神世七代といふが如き一つの系統に作上げられたのは、三皇五帝と云ふやうな支那の古い神聖的人格的思想に基いてゐるのではないかと考へる。そして又同時に、其の中には實在を考へられる高皇産靈神、神皇産靈神も入つてゐるのである。なほ更に想像を

逞しうするならば、最初は天御中主神と申上げるのは實は天照大神其の御方を指し奉る名であつたのが、後に獨立して造化三神の一として古事記に書上げられたのではないかとも思惟されるのである。

それで本居翁などは産靈を以て惟神の作用と解釋されてゐるが、産靈で神道を解するのは寧ろ舊式の解釋で、眞の古神道を解せんとするならば、其處に含まれてゐる外國要素を取除いて、日本固有の至純なものにまで分解して、歴史的に解釋するのが本當の行き方ではないかと思ふ。斯う云ふ結論に歸着すると、古事記や日本書紀には天照大神以前に他の神々を認めてゐるが、それは原始日本の神祇崇拜に道教の色彩が加はつた結果であつて、其の至純なところを考へるならば、古くは天照大神が第一祖神であらせられ、其の以前には神の存在を認めてゐなかつたのである。ところが段々知識が進むに隨つて、其處に種々の疑問を挟み、種々の不満を感じ、抑も國祖たる天照大神は如何にして現れ給うたか、又大八洲の國土は如何にして出來たかといふやうな點に知識の眼を見開いてかゝつた結果、其處に現れたのが諾冉二尊である。そして斯の如き天照大神以前の神々が作られた根本は何にあるかと云へば、それは外國要素としての陰陽思想であると私は思ふ。どうかすると、天御中主といふ神は天地創造の本源であらせられるといふ點に大なる重力を置いて日本の神道を解せんとする人もあるが、私はどうしても我々が日本の神祇として最も大きな力を持たせられるのは天照大神に在しますとする所に、日本の國民思想が

あるのではないかと思ふ。本居翁の如く、天照大神を單に日本民族のみが崇敬すべき神とせず、世界各國人の共に拜すべき神であるとするのは、今日に通用する議論かどうか、俄に斷定は出來ないが、兎に角日本の神祇として最初に現れられた大神は、やはり國家の中心たる皇室の祖神天照大神であらせられたと信ずるのであつて、其の以前の神々は外國要素の加はつた神であるまいかと疑ふのである。尤も天照大神以前に於て、我々の祖先の生活に最大の力を持つてゐると考へられた諸種の自然神、例へば風神、雨師、河伯などがあつたことは事實で、或は天照大神御自身も是等の神々をお祭りになつたとする傳説もあるが、是等を祭らせ給ふ事は決して神としての位置を低くするものではないと思ふ。

既に斯の如く我が神代の考の中には、外國要素殊に道教思想が入つて來てゐることが事實であるとす
るならば、進んで其の點を研究して明らかにすることは、日本の古神道の眞實の姿を知り得る喫緊の途
でなければならぬ。然るに今日までの古神道研究者が、道教の事を餘り多く研究されてゐないのは實に
遺憾な事である。自分としても格別まだ深い研究もしてゐない問題について、斯かる意見を提出するの
は甚だ矛盾してゐるやうであるが、特に斯の道を専門に研究しておいでに成る諸君に研究をお願いして、
本當の日本の古神道が如何に發展し進歩したかを明らかにして戴き、私の平生の不審を露らして頂くこ
とが出来れば、學界の爲にも此の上のない慶幸であると思ふのである。

田園に立つ人の心持

伏見桃山 村田太平氏作

- 一、栽培する作物には、我子に對すると同様の、あたたかい愛をそそぎたい。
- 二、種子を選ぶには、我身若しくは我子の嫁を選ぶと同様の、慎重さを以てしたい。
- 三、自己の食物の獻立を思つて、肥料や飼料の配合をしてやりたい。
- 四、己れの手足を洗ふと思つて、使つた鋤鍬を丁寧に洗つて直したい。
- 五、出來過ぎの作物は、我子を折檻すると思つて、無用の枝葉を剪除したい。
- 六、家畜も家禽も、家族の一員と心得て、親しみを以て接したい。
- 七、自分が蚤蚊に攻めらるる時を思つて、作物の害虫を除きたい。
- 八、都會は人間の造つた物だが、田園は神佛の造らせ給ひし物なる事を思つて田畑に立ちたい。
- 九、植物も動物も、結局は人間の爲に、犠牲となつてくれる事を感謝して對ひたい。
- 十、暑くとも苦しくとも、その言へない動植物の身を憐んで、思ひやりを以て農業をしたい。

（加藤市衛氏寄）